

第 17 回日本水大賞 ～NPO 風土工学デザイン研究所審査部門特別賞受賞～

6 月初め頃、CNCP 法人会員である「風土工学デザイン研究所」の竹林征三理事長から電話があり、表題に示すような賞の贈呈式が 7 月 7 日にあるので、理事としてぜひ参列欲してほしいとのことであった。受賞理由は、風土工学的手法による絵本・カルタや土木施設の命名等の創作活動が水文化の健全化に資するものとの評価である。祝意をこめ、トピックスとして紹介しておきたい。

日本水大賞は、秋篠宮殿下を名誉総裁、宇宙飛行士の毛利衛博士を委員長とする日本水大賞委員会による水関係の活動に対する表彰である。すでに第 17 回で、今年は毛利博士が館長を務める日本科学未来館で授賞式が執り行われた。新潟他 6 県を除く都道府県から総数 133 件（昨年は 171 件）の応募があり、内訳は各種団体 50%、学校 29%、企業 7%、行政 3%に対し、個人 17%となっている。活動分野的には、水環境 52%、水資源 18%、水文化 18%、水防災（復興支援含む）13%である。賞の内訳としては、大賞 1、国交省他関係省の大臣賞 6、市民活動賞 1、国際貢献賞 1、未来開拓賞 3、審査部会特別賞 3 の計 15 件である。これに日本ストックホルム青少年大賞 2 を加えると 17 件となる。

このうち大賞については、「地形特性を反映した津波模型による疑似津波の実演活動」と題して岩手県立宮古工業高校機械科が選ばれた。17 の受賞者の内訳は、大賞を含め中・高校生 6、市民ネットワーク 4、そして NPO 法人 4、と受賞 17 件のうち 8 割以上が地域に密着した活動に授与されたが、残念ながら大学関係者は皆無であった。総裁の秋篠宮殿下は開会の挨拶で、“私たちは、水から受ける恩恵に感謝し、先人たちの努力をさらに発展させ、安全で美しい水環境を礎とした国土を後世に引き継いでいく必要があります。本賞が、そのひとつの契機となり、多くの人々がそれぞれの地域で水を守り、水について活動をしていかれることを願っております。”と結んでおられたが、それにふさわしい内容であったと感じた。

さて、「風土工学デザイン研究所」は CNCP 通信 12 号にも紹介されているように、風土との調和を目指す、風土の誇りを形成する風土工学の必要性を提唱し、訴えてきている。そのアプローチの一つが意味空間の設計で、ソフトな意味空間デザインには物語・民話の創作やイベント、歌謡、歌留多、施設の命名等々がある。

具体的には、通算 17 年余の風土工学の普及啓発活動の一環として全国各地の風土を徹底的に調べ、その地に存する誇りうる風土資産を題材とした民話等を数多く創作してきた。それらのうち、地元の自治体（市）から創作民話最優秀賞を受賞した作品『鬼翔平物語』（入畑ダム水源地域の物語）他多数ある。また、カルタでは『諸美姫ものがたり風土歌留多』（森吉山ダム水源地）や『都道府県「かたち」いろはカルタ』、さらに風土資産の誇りの歌謡化が創作されたものに『こまで来たら北海道「オロロンライン編」』などがある。



表彰式は 12 時入場で、開会 15 分前以降は入場できないといった制限もあり、昼食抜きで 12 時半に行ってみると、すでに会場の指定された場所には竹林夫妻、忍見部長、藤澤さん、および佐川監事が見えていた。今朝 10 時から予行演習があったというから、皇族ご臨席のこうした催し物の執行プロセスの厳しさがある。もちろん写真も代表記者以外には禁じられている。各賞表彰が終わったところで秋篠宮・紀子妃両殿下が会場を去られる前に休憩を取って、両殿下と共に記念写真におさまる機会が与えられた。小生もその一人として最後列に並んだが、後日記念にということで事務局の日本河川協会から頂けるとのことのようだ。

3 時間余に及ぶ表彰式が全て終わって、別室で席を変え懇親会が行われた。上述のように 17 件の表彰の内 6 件が中・高校生グループであったこともあり、多くのが学生服姿の若い男女の姿が目立ち、どこか勇気づけられる思いをした。

なお、CNCP 会員関連では、個人会員三井元子理事が副理事長を務める NPO 法人「あらかわ学会」の第 8 回日本水大賞国土交通大臣賞の受賞がある。CNCP でも「ソーシャルビジネス提案コンテストの創設」を来年度からの試行を目指している。日本水大賞のような仕組みにまでは多くの時間が必要であろうが、努力したい。



授与式の状況（河川協会提供）

報告：有岡正樹（CNCP 常務理事）